



名大トピックス

No.132 平成16年5月10日発行 国立大学法人名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

国立大学法人名古屋大学がスタート



CONTENTS

・ごあいさつ 総長 平野眞一	2	・東山キャンパス合同竣工記念式典を挙行	22
・国立大学法人名古屋大学がスタート	3	新コーナー	
・第1回経営協議会が開催される	6	〈キャンパスクローズアップ〉野依記念物質科学研究館	24
・国立大学法人名古屋大学の運営組織	7	・博物館野外観察園セミナーハウスの看板上掲式が行われる	26
・国立大学法人名古屋大学役員・経営協議会委員・教育研究評議会評議員一覧	8	・大学院文学研究科が公開シンポジウムを開催	27
・理事・総長補佐の職務担当	9	・農学国際教育協力研究センターが2003年度第5回オープンセミナーを開催	28
・国立大学法人名古屋大学の組織・機構	10	・総長等表敬訪問一覧（平成16年1月～3月）	28
・平成16年度入学式が挙行される	11	・永年勤続者表彰式及び退職者懇談会が開催される	29
・総長の辞（平成16年度大学院入学式）	12	[INFORMATION]	
・総長の辞（平成16年度学部入学式）	15	・本学関係の新聞記事掲載一覧（平成16年3月分）	30
・来賓祝辞	18		



・生物活性分子をつなぐ
有本 博一 20

ごあいさつ



名古屋大学はこの4月1日から国立大学法人として新たな第一歩を踏み出しました。この大きな変換の日に、総長に就任することの責任をととても重く受け止めており、身の引き締まる思いです。

大学は良い人材を育てることと、知の創造の拠点となることが基本的使命であると考えており、本学では平成12年2月に制定された「名古屋大学学術憲章」で、本務として「研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創成と将来を担う勇気ある知識人を育成することによって社会に貢献する」と掲げております。このような基本目標のもとに、国立大学法人名古屋大学は、従来以上に、21世紀の学問の発展、科学技術の革新、優れた人材の輩出、高度医療などにおいて社会に貢献できる拠点大学としての活動を進めてまいりたいと存じます。

また、国立大学法人となった名古屋大学においては、これまで以上に大学経営などにおいて総長等執行部のリーダーシップが問われるわけですが、大学のリーダーシップは人材育成と知の創造の重要性を説明し、構成員や社会に理解していただくよう努めることと思います。あわせて、大学の存在の基本である知の源は紛れもなく個々の構成員であり、構成員を生かした組織としての名古屋大学の新体制を築き上げていくことが重要だと思っております。

最後に、名古屋大学は決して社会と無縁でなく、社会の一員としての果たすべき大きな役割が求められていることは明らかであります。国立大学法人としての名古屋大学は、教育・研究の他に、立地する地域社会の文化、政治、経済、産業などさまざまな課題等の解決や将来の発展に向けて、地域の市民、行政、企業等と連携を図り、時代に先駆けた提言を行うようますます努力を重ねてまいりたいと存じます。

より一層のご支援をお願い申し上げます。

平成16年4月

国立大学法人名古屋大学総長

平野 眞一



国立大学法人名古屋大学がスタート

国立大学法人名古屋大学が、4月1日（木）、発足し、本学は新たな一歩を踏み出しました。法人化の初日は、これを記念する式典、会議等が多数開催され、慌ただしい一日となりました。

最初に、午前8時30分から総長応接室において、平野総長から7名の理事に辞令が交付された後、第1回役員会が開かれ、初日のスケジュールなどについて話し合われました。また、豊田講堂第1会議室において、各理事陪席のもと、平野総長から監事2名、部局長、学内共同教育研究施設長21名（継続者29名除く）、総長補佐21名に辞令が交付されました。

続いて、午前10時からシンポジオンホールにおいて、「国立大学法人名古屋大学発足式」が行われ、平野総長が、役員、部局長、事務局等の幹部職員を前に、国立大学法人として本学が果たすべき役割や目標について決意を述べた後、平野総長から理事及び監事の紹介がありました。

その後、本部1号館玄関前で、約200名の教職員と

多数の報道関係者を前に、役員と教職員代表（過半数代表者等委員会委員長）による平野総長揮毫の「国立大学法人名古屋大学」の看板の除幕が行われました。

引き続き、国立大学法人名古屋大学発足記者会見が、本部第2会議室において、平野総長、理事及び監事が出席して行われました。記者会見では、平野総長が今後の抱負を述べた後、報道関係者から活発な質問があり、国立大学法人となった本学への関心の高さを伺わせました。

午後からは、第2回役員会、第1回、第2回教育研究評議会、部局長会が開催され、法人化後の諸規程や中期目標・中期計画等について話し合われました。

また、午後5時からシンポジオンホール2階ユニバーサルクラブにおいて、懇親会が、平野総長、理事、総長補佐及び事務局部課長の全学運営統括部メンバーが出席して開催され、多忙だった法人化初日の慰労と今後の本学の運営を共に担っていくメンバーとの親交を深めました。

《国立大学法人名古屋大学初日のスケジュール》

— 8 : 30 総長から理事に辞令交付（総長応接室）

第1回役員会（総長応接室）

・ 本日のスケジュールについて



— 9 : 00 総長から辞令交付（豊田講堂第1会議室）

監事2名、部局長、学内共同教育研究施設長21名（継続者29名除く）、総長補佐21名



— 10 : 00 国立大学法人名古屋大学発足式

（シンポジオンホール）

・ 総長あいさつ

・ 役員の紹介



— 10 : 30 国立大学法人名古屋大学看板上掲式

（本部1号館玄関前）



—10:45～11:15

国立大学法人名古屋大学発足記者会見
(本部第2会議室)

- ・総長あいさつ
- ・役員の紹介
- ・質疑応答



—13:00～14:30

第2回役員会(総長室)

- ・諸規程等の制定について
- ・中期目標・中期計画について
- ・予算の作成等について etc.

—14:30 第1回教育研究評議会(総長応接室)

- ・教育研究評議会規程について

—14:40 部局長会(本部第1会議室)

—15:00～17:00

第2回教育研究評議会(本部第1会議室)

- ・理事の任命について
- ・経営協議会委員について
- ・法人化後の諸規程等について
- ・中期目標・中期計画(原案)について etc.



—17:00～ 懇親会(ユニバーサルクラブ)



—(4月3日 第1回経営協議会)



第1回経営協議会が開催される — 本学の経営に関し大所高所から意見を伺う —

第1回経営協議会が、4月3日（土）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

経営協議会は、国立大学法人名古屋大学の経営に関する重要事項を審議する機関として設置されたもので、学外委員9名、学内委員9名で構成されています。

主な審議事項は、①中期目標についての意見に関する事項のうち、本法人の経営に関するもの、②中期計画及び年度計画に関する事項のうち、本法人の経営に関するもの、③学則（本学の経営に関する部分に限る）、会計規程、役員に対する報酬及び退職手当の支給の基準、職員の給与及び退職手当の支給の基準その他の経営に係る重要な規則の制定又は改廃に関する事項等となっています。

当日は、報道機関が取材に訪れるなか、平野総長から各委員に辞令が手渡された後、会議がはじまり、平野総長のあいさつ、千葉総務企画部長から本経営協議会の設置の趣旨及び各委員の紹介がありました。その後、それぞれの議題に沿って議事が進行され、中期目標・

中期計画等の各議題について、大所高所から貴重な意見が多数述べられました。

協議会終了後に開催された懇親会では、総長から各委員にお礼と本学の経営に関する協力の要請が述べられました。

〈議 題〉

1. 理事の任命について
2. 中期目標・中期計画について
3. 学則等の制定について
4. 予算の作成等について
5. 業務方法書について
6. 会計監査人候補者について
7. 取引銀行について
8. 損害保険について
9. 平成17年度概算要求スケジュールについて
10. 今後の開催予定について
11. その他



▲経営協議会委員に辞令を交付する平野総長



▲協議会の様子

(代表者) 総長選考会議 (代表者)

(総長を選考)

総長

- ・理事(総務関係)・副総長
- ・理事(病院・環境安全関係)・副総長
- ・理事(人事・労務関係)・副総長
- ・理事(教育・施設マネジメント関係)・副総長
- ・理事(研究・国際交流関係)・副総長
- ・理事(財務関係)・事務局長
- ・理事(法務関係)学外・非常勤

監事 (2名)

役員会 (8名)

(重要事項は役員会の議を経る)

部局長会 (連絡調整)

経営に関する学外の有識者 (9名) 経営に関する学内の代表者 (9名)

経営協議会 (18名) (主に経営面を審議)

教学に関する学内の代表者

教育研究評議会 (43名) (主に教学面を審議)



国立大学法人名古屋大学

役員・経営協議会委員・教育研究評議会評議員一覧

役員

総長
理事（総務関係担当）・副総長
理事（病院・環境安全関係担当）・副総長
理事（人事・労務関係担当）・副総長
理事（教育・施設マネジメント関係担当）・副総長

平野 眞一
山下 廣順
中島 泉
森 英樹
若尾 祐司

理事（研究・国際交流関係担当）・副総長
理事（財務関係担当）・事務局長
理事（法務関係担当）
監事
監事

山本 進一
渡橋 正博
林 光佑*（学外）
木村 洋一（学外）
湯本 秀之*（学外）

※印は非常勤

経営協議会委員

◇学外委員

- ・（独）農林漁業信用基金副理事長
- ・名城大学学長
- ・長浜バイオ大学バイオサイエンス学部長
- ・（財）長寿科学振興財団理事長
- ・トヨタ自動車（株）取締役副社長
- ・東レ（株）取締役社長
- ・日本ガイシ（株）代表取締役会長
- ・中日新聞社常務取締役
- ・伊藤忠商事（株）取締役社長

加藤 鐵夫
兼松 顕
郷 通子
小林 秀資
齋藤 明彦
榊原 定征
柴田 昌治
角田 牛夫
丹羽宇一郎
（五十音順）

◇学内委員

- ・総長
- ・理事・副総長
- ・理事・副総長
- ・理事・副総長
- ・理事・副総長
- ・理事・副総長
- ・理事・事務局長
- ・医学部附属病院長
- ・附属図書館長

平野 眞一
山下 廣順
中島 泉
森 英樹
若尾 祐司
山本 進一
渡橋 正博
井口 昭久
伊藤 義人

教育研究評議会評議員

- ・総長
- ・理事
- ・理事
- ・理事
- ・大学院文学研究科長
- ・大学院教育発達科学研究科長
- ・大学院法学研究科長
- ・大学院経済学研究科長
- ・情報文化学部長
- ・大学院理学研究科長
- ・大学院医学系研究科長
- ・大学院工学研究科長
- ・大学院生命農学研究科長
- ・大学院国際開発研究科長
- ・大学院多元数理科学研究科長
- ・大学院国際言語文化研究科長
- ・大学院環境学研究科長
- ・大学院情報科学研究科長
- ・環境医学研究所長
- ・太陽地球環境研究所長
- ・附属図書館長
- ・医学部附属病院長

平野 眞一
山下 廣順
若尾 祐司
山本 進一
神尾美津雄
村上 隆
佐分 晴夫
北原 淳
八田 武志
大峯 巖
杉浦 康夫
澤木 宣彦
松田 幹
中西 久枝
浪川 幸彦
近藤 健二
黒田 達朗
阿草 清滋
児玉 逸雄
上出 洋介
伊藤 義人
井口 昭久

- ・総合保健体育科学センター長
- ・エコトピア科学研究機構長
- ・大学院文学研究科
- ・大学院教育発達科学研究科
- ・大学院法学研究科
- ・大学院経済学研究科
- ・大学院理学研究科
- ・大学院医学系研究科
- ・大学院工学研究科
- ・大学院生命農学研究科
- ・大学院国際開発研究科
- ・大学院多元数理科学研究科
- ・大学院国際言語文化研究科
- ・大学院環境学研究科
- ・大学院情報科学研究科
- ・教育研究共同施設連合選出
- ・教育研究共同施設連合選出
- ・評議会選出
- ・評議会選出
- ・評議会選出
- ・評議会選出

島岡 清
松井 恒雄
江村 治樹
寺田 盛紀
和田 肇
友杉 芳正
佐藤 正俊
高橋 雅英
宮田 隆司
小林 迪弘
櫻井 龍彦
金銅 誠之
吉村 正和
林 良嗣
井原 俊輔
末松 良一
巽 和行
浅井 滋生
河野 正憲
近藤 孝男
本城 秀次

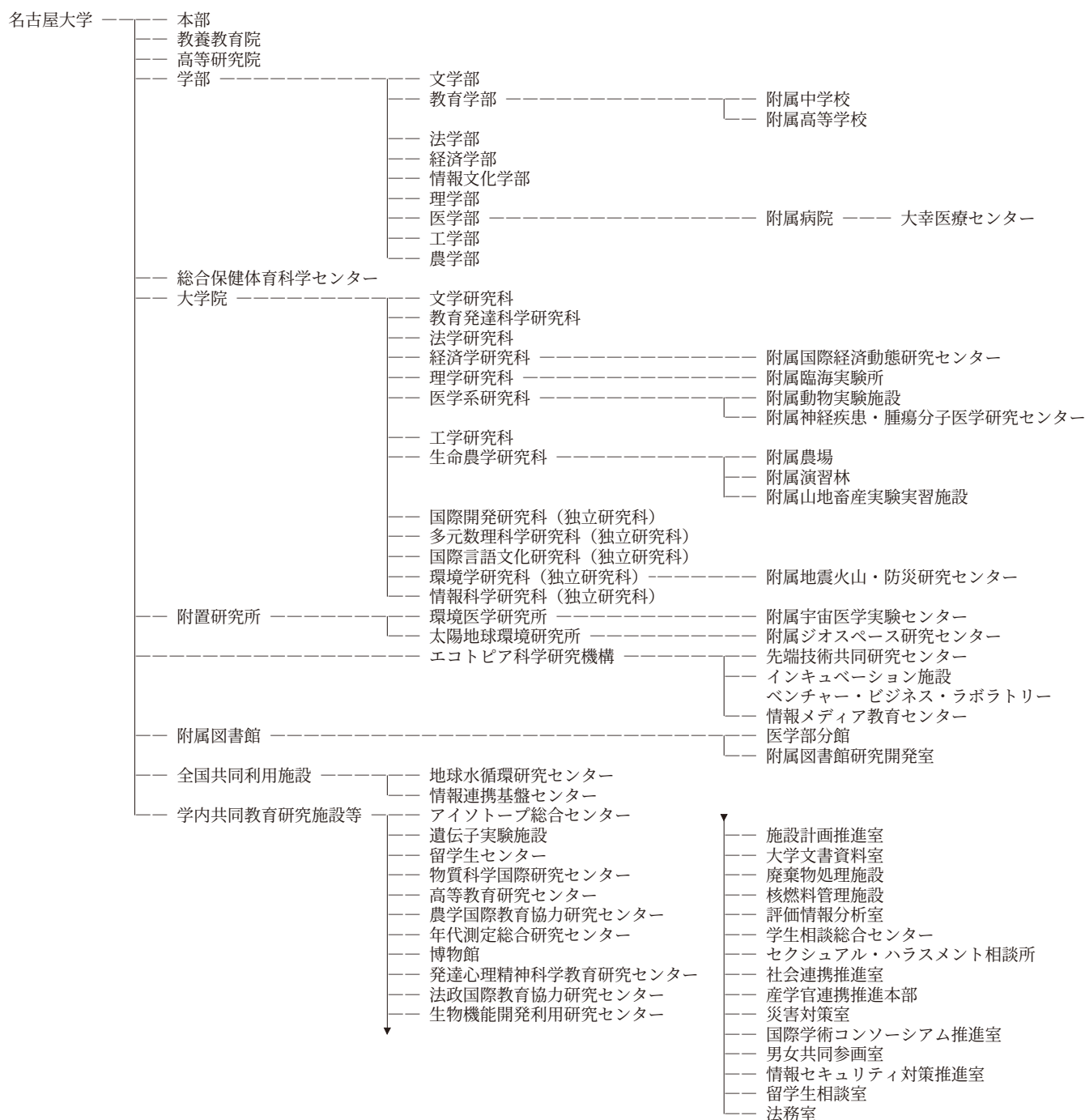


理事・総長補佐の職務担当

理 事	総 長 補 佐
総務関係担当 山下 廣順 副総長	松下 裕秀（大学院工学研究科） 目標・評価担当
	市橋 克哉（大学院法学研究科） 法人化担当
	坂部 俊樹（大学院情報科学研究科） 広報・情報担当
	千葉 秀夫（総務企画部長） 組織・運営担当
病院・環境安全関係担当 中島 泉 副総長	祖父江 元（大学院医学系研究科） 鶴舞地区担当
	中村 正秋（大学院工学研究科） 労働安全担当
人事・労務関係担当 森 英樹 副総長	金井 篤子（大学院教育発達科学研究科） 男女共同参画担当
	竹中 千里（大学院生命農学研究科） 人権担当
教育・施設マネジメント関係担当 若尾 祐司 副総長	山本 一良（大学院工学研究科） 教養教育担当
	小川 正廣（大学院文学研究科） 入試・入試改革担当
	谷口 元（大学院工学研究科） 施設整備担当
研究・国際交流関係担当 山本 進一 副総長	竹田 美和（大学院工学研究科） 産学官連携担当
	太田美智男（大学院医学系研究科）
	早川 操（大学院教育発達科学研究科） 国際連携担当
	戸田山和久（大学院情報科学研究科） 社会連携・社会貢献担当
	正畠 宏祐（大学院工学研究科） 研究・教育支援担当
	藤井 良一（大学院理学研究科） 研究推進担当
	岡本 耕平（大学院環境学研究科）
財務関係担当 渡橋 正博 事務局長	成瀬 量（研究協力・国際部長） 研究協力担当
	渡辺 芳人（大学院理学研究科） 資源配分担当
法務関係担当（非常勤） 林 光佑（弁護士）	瀧本 寛（財務部長） 予算・会計担当



国立大学法人名古屋大学の組織・機構



■平成16年度入学式

平成16年度入学式が挙行される

平成16年度名古屋大学入学式が、4月5日（木）、豊田講堂において、挙行されました。午前10時からの大学院入学式に続いて、学部入学式が午前11時15分から行われ、会場の豊田講堂は、補助いすを使用しても立ち見が出るほどの満員となり、隣接するシンポジオンホールも会場として使用されました。

今回の入学式は、国立大学法人名古屋大学となって初めての入学式で、本学は、新たに、大学院入学生2,380名（博士前期課程1,649名、大学院法学研究科専門職学位課程（法科大学院）82名、博士後期課程649名）及び学部入学生2,236名を迎えました。

名古屋大学交響楽団による奏楽で始まった式典では、平野総長が、大学院入学生及び学部入学生に対し、それぞれ辞を述べられました。また、大学院国際言語文化研究科博士課程前期課程入学生の鈴木宣子さんと農学部入学生の松原篤史さんが入学生総代として、入学に当たって、学生としての本分を全うすることを宣誓

しました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の岡田邦彦氏（株式会社松坂屋取締役社長）から祝辞をいただきました。

式典終了後には、雲一つない青空の下、豊田講堂前に詰めかけた学生に、部活やサークルの勧誘を受けたり、保護者などと晴れやかな表情で記念撮影したりする入学生の姿が見られ、入学生は、これからの学生生活に期待を膨らませているようでした。

なお、式典の様子は、シンポジオンホール及び豊田講堂ピロティにおいてライブ中継され、豊田講堂に入ることが出来なかった学部入学生や保護者らがスクリーンに映し出される映像を熱心に見つめていました。

また、この模様は、昨年同様、インターネットでもライブ中継されました。映像は、編集され、本学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/>）でも視聴できます。



■平成16年度入学式

総長の辞（平成16年度大学院入学式）

平 野 眞 一



名古屋大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎します。

名古屋大学大学院は、本日ここに、博士前期課程1,649名、法学研究科専門職学位課程（法科大学院）82名、後期課程に649名、合計2,380名の入学生を迎えました。

皆さんは、本日から、それぞれが大学院生として学位あるいは資格を目指すスタートラインについたことになります。

皆さんは、すでに4年あるいは6年以上にわたる学生生活を終えた後の入学であり、大学生活のあり方を理解した上での、更なる向学心による進学であります。

名古屋大学は、皆さんの高い志を大切にしたい教育・研究の環境を提供します。本学は「大学院重点大学」として、教育・研究の環境整備に努めてきましたが、入学生数においても学部入学生数2,236名を上回る大学院入学生を迎えております。

名古屋大学の誇るべき自由闊達な風土は、比較的短い歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を生み出

し、社会に貢献する人材を育ててきました。

そのような輝かしい成果を上げてきたのは、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えており、今後ともこれまでの伝統は大切にしていきます。

全国の国立大学は、本年4月より国立大学法人として、新たな時代に入りました。大学は、優れた人材の育成と創造的な研究の遂行による貢献を社会から委託されており、そのための場所、資金が提供されております。

したがって、私どもは、優れた教育・研究を行う義務を社会に対して負っております。「国費で運営される法人格を取得した大学」として自主自律して、教育・研究を通じて社会貢献していきます。

国立大学法人となっても、「研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創成と将来を担う勇気ある知識人を育成することによって社会に貢献する」という基本理念は不変であります。

本学は、優れた人材の育成、学問の発展、創造的な科学技術の創成、安全で高度な医療などにおいて社会に貢献できるわが国有数の基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

皆さんを迎えた名古屋大学は、次のようなミッションを達成するように努めます。

1. 人文・社会・自然の学問の壁を越えた研究のコミュニティを創出し、世界屈指の知的成果を産み出す。
2. 基幹的総合大学にふさわしい学術と文化の薫り高いキャンパスを実現し、豊かな人間性を持つ勇気ある知識人の育成に努める。
3. 先端的および多面的な学術研究活動と、国内外で

指導的役割を果たしうる人材の養成を通じて、地域および産業の発展に貢献する。

4. 国際的な学術連携および留学生教育の充実を図り、世界的な教育・研究の拠点として国際交流に貢献する。

今や、私どもはグローバリゼーションのなかでその存在を示さなければなりません。世界に通じる人間性と基礎学力に加えて総合力を身に付けていただきたい。

知の継承と次世代への文化の発展を支えるためには、異分野間での強い連携と協力関係の強化が必要であります。

言うまでも無く、学術・文化は「人」が創造するものであり、「学」はまさに「Humanity」そのものです。「学」の発展のためには、文系・理系の力強い連携が必須であり、総合大学としての名古屋大学はその特長を生かして、「人」を基軸とした活動を行います。

「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想をもつことができる若手の育成が不可欠であります。これからの大学のあるべき姿の一つは、年齢・性別などにとらわれず、個性的な人材が尊ばれる、若手が目立ってよい環境を整えることであろうと思っています。

それが実現されてこそ、国内にとどまらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信します。本学は、そのような環境作りに努めます。

大学院に入学された皆さん、総合大学に学ぶ学生として、豊かな人間性を持つ国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけてもらいたい。文系、社会系を専攻する方はもう一度理系の基礎を学び、理系を専攻する方は文系、社会系の基礎を身につけて社会の仕組みを学んでいただきたい。

皆さんは、学部生として学生生活を経験した上で、志を持っての進学ですので、「何のために、何を求めて名古屋大学大学院に入学したか」と尋ねる必要はないと思いたい。しかし、数日前まで大学院生を教えておりました私は、失礼な言い方かもしれませんが、「自分のある姿を見つけていない」学生さんにたびたび接しました。「自分が求めるものは何か、最善を尽くすことが出来るものは何か」を早く見出し、その「夢と希望」に向かって果敢にチャレンジしていただきたい。

大学院は学部の単なる延長ではありません。「自分の頭で考え、答えを出し、行動する」習慣を身に付けましょう。と同時に、「世界で、日本で何が起きているか」に鋭い目を向けてください。あなた方の生活の基盤であり、将来の自分を置く社会なのです。

大学院では特に、世界で誰もやっていない研究を進めます。成果が出ず真剣に悩むこともあると思います。その苦悩が厳しければ厳しいほど、課題を解決しあるいは新しいことを発見した時の喜びは大きいものです。課題を見つけ、情熱をもって果敢にチャレンジしてく





ださい。研究は、往々にして計画を立てたととしても予測どおりには進まず、頂上が見えない山に登るようなものです。登ったと思うと、また次のより高い山が現れます。とはいえ、「知」を求める旅は厳しいが、また楽しいものです。

20世紀は、欧米に追いつき、追い越すために大きな努力が払われてきた時代であり、物質文明を飛躍的に発展させてきました。しかし、一方では、人間とのインターフェイスが弱かったために、人類全体にかかわる幾多の問題が残されていることも事実であります。今は、「人」を基軸においた、心の豊かさを大切にしたい持続可能な社会を構築するために、叡智を結集し行動する時期であります。国、大学、産業界は大きな転換期にあります。目的と動機を失わず、勤勉・誠実に新しい時代を創り上げるために努力すれば、活力ある社会に再生することは可能であると確信しております。皆さんも、新しい社会の創生に向けて、我々とともに真摯に取り組んで下さい。皆さんは、今後の日本いや世界をリードすることが期待されている方々なのです。

名古屋大学では、持続可能な社会を構築するための全学の叡智を集めて、本年4月より全学組織として「エコトピア科学研究機構」を設置いたしました。これは、「人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献する」ことを使命とする本学の理念を実現しようとしております。

とりわけ、人間性と科学の調和的發展を目指し、人

文科学、社会科学、自然科学をともに視野にいたした高度な研究と教育をする名古屋大学大学院に学ぶ皆さん、自分の分野の専門的な学問のみに留まることなく、好奇心をもって他の分野の基礎素養を身につけるように努めてください。

皆さん、キャンパス内では非常に多くの留学生に会うでしょう。名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人を越える留学生が学んでおり、その数は全国の国立大学でトップクラスであります。

キャンパスはまさにすばらしい国際交流の場でもあります。積極的に留学生と交流し、お互いの言語や文化を学びあい、理解しあって下さい。グローバル化においては、人間関係は何にも勝るものであります。国際交流のためのツールでもあるコミュニケーションスキルを在学中に身に付けて、国際的にも活躍する基盤を築いてください。

終わりにもう一度皆さんにお伝えします。今後、受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識を持って積極的に取り組んでこそ、真理を探究、知を創成する楽しみが生まれます。将来を担う皆さんに期待しています。新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けてください。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上で、大学院入学生への辞とします。



■平成16年度入学式

総長の辞（平成16年度学部入学式）

平 野 眞 一

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学は、本日ここに2,236名の学部入学生を迎えました。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは、澁刺とした気分で、高い志を持ちまた胸躍らせてこのときを迎えられたでしょう。ぜひ、この気持ちを大切にしてください。大学も、皆様のこの気持ちを大切に教育・研究の環境を提供します。

名古屋大学は、前身である名古屋帝国大学としての1939年の開学以来65年ほどの比較的短い歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を生み出し、社会に貢献する人材を育ててきました。

これは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な風土の中から生まれてきたものであります。そのような輝かしい成果を上げてきたのは、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えております。

皆様は、本年4月から発足した国立大学法人名古屋大学への新入学生であります。名古屋大学は、「国費で運営



される法人格を持った大学」であります。国立大学法人となっても、「将来を担う人材の育成と優れた研究の創造を行い、社会に貢献する」という基本理念は不変であります。

名古屋大学は、優れた人材の輩出、21世紀の学問の発展、先導的な科学技術の創出、安全な高度医療などにおいて社会に貢献できるわが国有数の基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学です。

皆さんが社会で活躍するための専門教育については、「研究重点大学」としての実績ある教育システムを準備しておりますが、同時に21世紀をリードする人材の育成には「教養教育」は欠かせません。

本学では、全学の教員が担当する「教養教育院」を設置し、教養教育を中核とする「全学教育」を行い、“研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知的効果の創成と豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人”の育成に努めております。



既成概念にとらわれず、科学的・歴史的な知的財産を踏まえて、新たな分野、課題に果敢に挑戦すること、また自らの社会的な責任と役割を自覚して社会的弱者への思いやりを持ち、国内および国際社会における正義の実現に向けて行動する人間性を持った知識人を育てようとしております。

「学」はまさに「Humanity」そのものであります。「学」の発展のためには、人文科学、社会科学、自然科学の強い連携のもとに、本学では総合大学としての特長を生かし、人間性と科学の調和的発展を視野にいたした高度な教育と研究を行います。「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想をもつことができる若手の育成が不可欠であります。これからは、年齢・性別などにとらわれず、個性的な人材が尊ばれる、若手が目立ってよい環境を整えることであろうと思っています。それが実現されてこそ、国内にとどまらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信しております。

皆さん、ここで、「生を受けて学ぶことが出来る今ある自分の環境に感謝」とするとともに、今一度胸に手をあてて自問してみてください。「何を求めて、何をしたいか名古屋大学に入ってきたか」と。「自分が最善をつくすものは何か」を早く見出し、その夢を実現するよう努力していただきたい。

「人生の実りは、日頃から貴方がどんな種子を蒔いたか」が重要です。「人生の種子」とは「考え方」あるいは「心構え」といってよいかも知れません。自分の人生という畑に



責任をもって、種子を蒔きましょう。

当然ですが、大学への入学は目標ではありません。「夢と希望」を叶える過程の一里塚です。どのような過程を経て最終目標に到達するのか、その道筋を立てましょう。「夢と希望」は人生を活力に満ちたものにします。決して平坦ではないこの人生を、より良く生きていこうとするならば、「夢と希望」をもち、目的の達成に向けて地道な努力を続ければ、皆さんが進む道は大きく開けます。

大学では、何かを漫然と待つのではなく、自分から求めて積極的に行動してもらいたい。受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識をもって積極的に勉学し、行動してこそ、知の探求、真理を探究する楽しみが生まれます。

講義では、これまでに人間が人文と社会と自然の諸現象を観察し、理論化し体系づけてきた学問体系の形成過程を教え、専門的な知識に裏付けられた批判的な思考力と構成力を養うようにしていきます。分からぬことがどれだけ多くあるかを知ることになるでしょう。これは皆さんの好奇心を刺激し、学習意欲を掻き立てることになるでしょう。

と同時に、現在、世界で、日本で何が起きているかに、鋭い目を向けてください。わが国の将来を担うのは皆さんです。希望の持てる社会にしなければなりませんし、国際的にも責任ある国にしなければなりません。

名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人以上の留学生が学んでおり、その数は国立大学ではトップクラスであります。キャンパス内では、接する留学生から、その国の言語



はもとより、歴史、文化や宗教などを学べるチャンスが一杯です。

キャンパスは、まさに素晴らしい国際交流の場です。グローバル社会においては、人間関係はどんなものより大切であります。留学生には、名古屋大学に留学して満足してもらえる環境を整えたいし、日本人学生には国際的に活躍できる基礎を築いてもらいたい、と思います。

在学中に、異なる国の方々と議論できるコミュニケーションスキルを身に付けてください。

皆さんは、今後、このような教育・研究環境のなかで学んでいくことになりますが、新しい時代を創り出す「高い志」をもち続けて積極的に学んでください。学生生活のもう一つの重要な活動は、多くの教員と交流し、人生の機微を学ぶとともに、互いに心から信頼しあえる真の友人をつくることです。

また、大学は、ただ単に知識の吸収の場であるばかりでなく、全人教育の場でもあります。全人教育にあっては、課外活動である部活動が果たす役割は大きいものです。

部活動では、強健な身体と不屈の精神力を養うことが出来るとともに OB 会を介して広い世代の人間との交わりがあり、今後の人生において大切な財産になります。名古屋大学は、運動関係の部活動が活発な文武両道に通じる人間教育を目指している大学のひとつであり、昨年は7大学戦で総合優勝しており、今年も連覇を目指しております。

「学習」する意欲を失わず、同時にクラブ活動などを通



じて実りある大学生活を送り、総合大学の学生として良い人間関係を築き、心身を磨き、学問的にも人間的にも大きく成長されることを期待しています。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上をもって、入学生への辞といたします。



■平成16年度入学式

来賓祝辞

名古屋大学全学同窓会副会長(株式会社松坂屋取締役社長)

岡田 邦彦

名古屋大学ご入学、本当におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。2236人、お一人お一人の周りにお喜びの方がいらっしゃると思います。今日は大いに乾杯をしていただきたいと思います。

みなさんは本日、名古屋大学にめでたく入学されると同時に、私ども名古屋大学全学同窓会の準会員として仲間となりました。全学同窓会は一昨年の10月に、今後、社会と大学との結びつきをより強くしていこうという趣旨で発足しました。本日入学されたみなさん、在学生、卒業生、留学生、研究生、教職員を含めて現在、約10万人の会員です。

同窓会の値打ちは、「誰がいるかを知っている」、英語でいうとノウフー（Know-Who）にあり、昔からの日本語で言いますと「人脈」です。みなさんも今日から10万人規模の人脈に、繋がりました。学問の世界だけでなく、実業社会に出ればもちろんのこと、この人脈というのは非常に大事なネットワークです。そうした意味で同窓会をお忘れなくお願いしたいと思います。

今年は名古屋大学が国立大学法人になった元年で、



みなさんは第一期生です。今までの名古屋大学は文部科学省の一地方部局でしたが、これからは平野眞一総長をトップとする一つの法人です。法人化は、端的に言うと、自主性を持ち、より高い価値を生み出すために、独自性のある個性豊かな大学を作っていくことができる権限を持ったということです。

現在、世の中は大きく変わっています。私は「3つのGがある」と申し上げています。1つ目のGはグローバリズムです。1つの地球として政治、経済、文化が交流する時代になっています。現に1200人を超える留学生の方がこのキャンパスで学ばれており、みなさんはグローバリズムを、身近に感じることができると思います。

2つ目のGは、グリーンの問題です。私達が乗っている宇宙船地球号が、いつまで保つんだらうか、このままいくと、そのうちに燃え尽きてしまうのではないかという危機感から起きている環境問題です。

3つ目は、グレイイングです。日本人の19パーセントが65歳を超え、少子高齢化が加速しています。高齢化は英語で言いますと、灰色のグレイにINGを付けて、



グレイニングと言います。このグローバリズムとグリーンイングとグレイニングと、この3つのGが今、日本が解決すべき課題として、私達の周りに押し寄せています。

そういう非常に大きな歴史の変化する時代にみなさんは大学に入学されたということを忘れないでいただきたいと思います。

私は1958年に経済学部を卒業しておりますが、先輩としてみなさんに贈る言葉があります。ものをはかるのにモノサシがあるように、自分の心をはかるのにココロザシという尺度があってもいいではないかということです。そのメジャーにどんな目盛を付けるかと考えたときに、四角、丸、三角という3つの目盛を考えました。

四角は知です。知識、知恵。学問をしっかりやるという知です。

丸は情です。情熱とか人情とか、心の問題です。この丸はできるだけ大きくして、人と人と心を割って話し合える情の持ち主であってほしいと思います。

3つ目の三角は意です。これは倫理感であります。三角は正しい方向を示す羅針盤の先端に付いております。自分が正しい方向を向いているかということです。

ですからココロザシの目盛は、四角、丸、三角、日本語でいえば知、情、意。ギリシャ語で言えば、ロゴスとパトスとエトスです。学校という場合は、そういったものを磨く場であります。是非、新しい意味の勉強にチャレンジしていただきたいと思います。

同時に、知、情、意を磨いていく場合に基礎となるのは、体です。健康には十分気を付けてください。いざという時に頑張りがきかないと、みなさんの持っている優秀な頭脳も、優しい心も、正しい姿勢も、こころざし半ばで終わるということもあるわけですから、体力を作ることは非常に大事です。

私はいつも学問に文系理系という壁は立てない方がいいと考えています。私は経済学部の同窓会の会長をやっておりますから、今までは経済学部の人とだけつきあっておりましたけれども、全学同窓会ができてからは、医師、弁護士、エンジニアなど、いろいろな方

と交流する場が増えました。これが本当の知のあり方だと思います。

大学で幅広い知識、人間関係、あるいは正しい姿勢というものを学んでいただき、充実した4年間を過ごされることを心から期待しています。そして、名古屋大学というブランドが、我々共通の誇り、プライドであるというようにしていただきたいと思います。現在、私ども卒業生は、名古屋大学という名前に非常に誇りを持っています。みなさんも名古屋大学の質をより高めていただいて、一生懸命やっていただくことを心から期待しています。本日は誠にありがとうございました。

(祝辞は、大学院入学式と学部入学式のそれぞれに頂戴しましたが、学部入学式に頂戴した祝辞を掲載させていただきました。)





生物活性分子をつなぐ

有 本 博 一

抗生物質に対する耐性菌の出現は社会的に大きな問題になっています。院内感染症の原因となるメシチリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）は、新聞でもお馴染みになっています。耐性菌の出現確率を下げるためには、臨床での薬剤の適正使用が重要といわれています。

上述の MRSA という多剤耐性菌の特効薬は抗生物質バンコマイシンです。切り札バンコマイシンにさえ耐性を示す細菌（バンコマイシン耐性腸球菌；VRE）が80年代半ばに欧州で発見され脅威となってきています。幸い、健康者は VRE に感染しても発症しないそうですが、体力が落ちた患者が発症すると多剤耐性であるだけに治療困難です。また、2002年にアメリカの2つの州で確認されたように、より病原性の強い MRSA が VRE の持つ耐性の性質を獲得する傾向が広がると問題は深刻です。

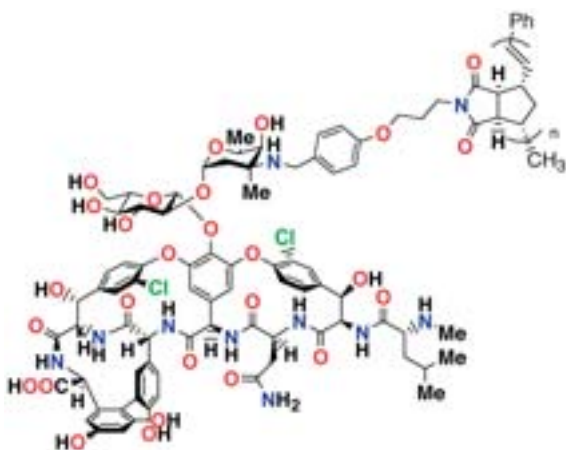
私自身を含めてライフサイエンスを指向した有機化学者は、必要な時に備えて新規薬剤を用意する基礎研究にも取り組んでいます。本質的に新しい化学構造を

持った抗生物質は段々発見が難しくなっており、合成化学の力と分子設計のアイデアで有用物質創成を目指すわけです。

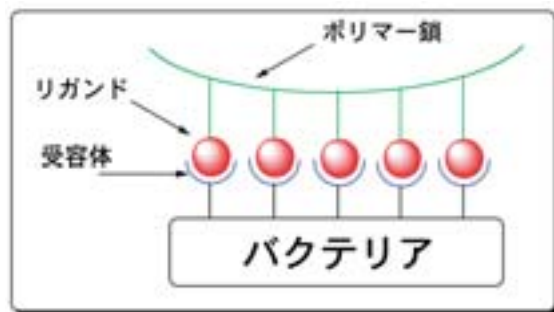
私の場合、アイデアのヒントはバンコマイシン抗菌性発現の分子機構にありました。この抗生物質は MRSA などグラム陽性菌の表面に特異的に結合し、立体的に細胞壁合成（トランスペプチレーション過程）を阻害すると考えられています。菌の表面に存在して本来はバンコマイシンが結合するはずの受容体がわずかに変化してバンコマイシンを結合できなくしたのが VRE 等の耐性菌なのです。この「失われた相互作用」を上手く回復させると抗菌性が再びあらわれると考えました。

実際に合成した分子の化学構造を示します（図1）。化学を専門とする読者以外は図2だけをごらんください。ポリマーの鎖の上にバンコマイシンの分子をいくつもぶら下げるアイデアです。適切な「ひも」をデザインすると、菌（バクテリア）の表面と強い相互作用が起こることがわかりました。それに伴って、耐性菌 VRE に対する抗菌性ができました。

ポリマーのうえに多数の生物活性分子を「ぶらさげ



▲図1



▲図2



▲図3 バンコマイシン耐性腸球菌
(提供：国立感染症研究所 荒川宜親先生)

る」研究（マルチバレント化）は、糖質科学の分野では1970年ごろから盛んに研究されてきました。しかし、このような抗生物質での成功例は他にありません。私達の研究結果は、直ぐに薬となる段階にありませんが、今後の分子を設計する際に有用なヒントを与えていると思います。

VREの治療薬として脚光をあびている新薬リネゾリドやシナシッドは、バンコマイシンとは異なる作用機構（タンパク質合成阻害）に基づいています。これらには重篤な副作用があらわれる場合もあり、新たな薬剤の開発に向けた取り組みは製薬企業においても続けられています。

名古屋大学では、伝統的に生物活性天然有機化合物の研究が盛んです。単独では弱い生物活性物質と生体内受容体との相互作用を増強する手法としてマルチバレント化は糖質科学以外の分野においても広く使えるはずです。私は、将来的には天然物化学の知見をいかなしながら新規物質を創成していきたいと考えています。このアイデアは幸い高等研究院プロジェクトの萌芽的研究のカテゴリーに選ばれました（図4）。

低分子化合物の有機合成をおもな仕事にしている身にとっては、分子量域が少し大きくなるだけで、構造解析、精製法など適用可能な手法が大きく変わるなど苦労も多い毎日ですが有用な分子設計概念として定着させることを夢見て、さらに研究を進めていきたいと思っています。

天然有機低分子は
生体分子認識の精巧なセンサー



細胞やタンパク質を面として認識する
生物活性有機中分子の世界



精密有機合成化学の活躍

▲図4

プロフィール

ありもと ひろかず

昭和41年横浜市出身。平成7年博士（理学）慶應義塾大学。平成2年旭硝子株式会社中央研究所、静岡大学理学部助手、同助教授を経て、平成13年より名古屋大学大学院理学研究科助教授。平成15年より高等研究院流動教官。現在、文部科学省学術調査官（科学研究費補助金担当）、科学技術振興機構さきがけ研究21研究員を兼任。





東山キャンパス合同竣工記念式典を挙行 — 野依特任教授がノーベル化学賞の賞金を本学に寄贈 —

「野依記念物質科学研究館」、「野依記念学術交流館」、「理学館」、「高等総合研究館」、「IB 電子情報館」(Ⅱ期)の竣工を記念して、東山キャンパス合同竣工記念式典及び祝賀会が3月18日(木)、挙行されました。

記念行事には、文部科学省から遠山文部科学省顧問

(前文部科学大臣)、大島文教施設部技術参事官、藤原研究振興局学術機関課長、平井文教施設部名古屋工事事務所長、また、野依良治理化学研究所理事長(本学特任教授)、小池日本私立学校振興共済事業団常務理事(前本学事務局長)ら学内外の関係者約200名が出席しました。

野依記念物質科学研究館玄関前での関係者によるテープカットに引き続き、施設見学が行われ、その後、記念式典及び祝賀会が、野依記念学術交流館において開催されました。

式典では、松尾総長が施設に対する熱い思いと関係各位に心からお礼を述べ、野依特任教授からも「浅学一才、ひたすら仕事をした集大成に誇りと安堵を覚える。登ろうとせずエベレストに登頂した人はいない。今、ベースキャンプができた」と喜びのあいさつがありました。



▲松尾総長、渡橋事務局長、北村雅人物質科学国際研究センター教授の案内のもと、施設見学をする遠山文部科学省顧問



▲野依記念物質科学研究館玄関前でのテープカット



▲式典であいさつする松尾総長



▲式典であいさつする野依特任教授



▲式典で祝辞を述べる遠山文部科学省顧問

また、この席で、野依特任教授が、「名古屋大学は私にとってかけがえのない存在。感謝の気持ちを込めて次世代を担う若い後進が志を遂げるための助けに使ってほしい」とのメッセージを添え、ノーベル化学賞の賞金全額を贈呈する目録を松尾総長に手渡されました。

続いて、世界を先導する研究拠点等の完成を祝い、遠山文部科学省顧問、萩原文教施設部長（大島文教施設部技術参事官代読）から祝辞が述べられました。また、岡田施設部長による工事概要報告に続いて、松尾総長からこのたび竣工した施設の建設に携わった企業の代表者に感謝状が贈呈されました。

式典終了後に行われた記念祝賀会では、平野工学研

究科長（現総長）のあいさつ、関係者による鏡開きの後、大峯理学研究科長の発声で乾杯が行われ、参加者は、本学に新たに建設された5施設の竣工を祝いました。



▲ノーベル化学賞の賞金を贈呈する目録を松尾総長に手渡す野依特任教授



▲記念祝賀会での歓談の様子



野依記念物質科学研究館



野依記念物質科学研究館が、東山キャンパスに竣工しました。

この施設は、ノーベル化学賞を受賞した野依良治本学特任教授（理化学研究所理事長）の研究業績を称え、その研究を継承発展すること及び創造的研究成果を広く世界に発信するために整備されたものです。また、世界を先導する研究交流拠点として、世界に通用する人材発掘・養成、国内外の優れた研究者との共同研究を推進する研究室・実験室を設け、化学系研究実験棟のモデルとなる施設を目指しています。

同館は、鉄骨鉄筋コンクリート造、地上7階地下1階、延床面積7,117㎡を有し、外壁には、メンテナン

スデッキを設置し、各階実験室からの実験排気管等を安全にメンテナンスでき、増設も容易にできるようになっています。また、外壁材は、設置する面により、日除け、ガラススクリーン、安全性などの機能的な特長を持ったものが採用されています。

2階のケミストリーラウンジは、次世代研究者のための「インスパイアスペース」、「野依博士の足跡紹介」、「ケミストリーヒストリー」及び「企画展」を展示・開催し、それを一般公開することにより、野依良治本学特任教授（理化学研究所理事長）のノーベル賞受賞記念施設として地域に貢献していきます。

また、3階から6階までの実験室フロアの建物構



▲共同研究セミナー室



▲実験施設内部

造は、チューブ構造（外郭構造）とフラットスラブ構造（無梁版構造）の組合せにより内部の壁を少なくし、さらに平面レイアウトの変更にフレキシブルに対応出来る構造となっています。

多くのドラフトチャンバーを使用するため、給気については、空調の風量バランスを考慮したシステムとなっています。



▲外観（北東側）

名古屋大学では、近年、多くの施設が新たに竣工し、キャンパスも様変わりしつつあります。キャンパスクローズアップでは、毎回、キャンパス内の施設を紹介していきますので、どうぞご覧下さい。



博物館野外観察園セミナーハウスの 看板上掲式が行われる

博物館野外観察園セミナーハウスの看板上掲式が、平成15年度の最終日となる3月31日（水）、雨上がりのさわやかな陽射しの中、行われました。

上掲式には、松尾総長、佐々木副総長、足立博物館長、成瀬研究協力調整官を始め、約30名の学内関係者の参加があり、最初に、松尾総長から、セミナーハウス建設の経緯をたどりながら、予想以上に立派な建物が完成したことの喜びと、これから野外観察園とセミナーハウスが教育・研究の場に幅広く利用されていくことへの期待が述べられました。続いて、松尾総長と



▲上掲式前に、歓談する松尾総長、佐々木副総長、足立博物館長

足立博物館長により、シナノキの板で作られたセミナーハウスの看板が上掲され、盛大な拍手でセミナーハウスの完成を祝いました。上掲式後、足立博物館長の案内で、松尾総長、佐々木副総長がセミナーハウスを見学しました。

この野外観察園は、東山キャンパスの南西に位置する約4,000m²の緑地で、昭和38年頃に旧教養部の教育・研究のために造られ、近年は情報文化学部・人間情報学研究科の実験圃場として使われていました。平成15年度からは、学芸員資格取得のための博物館実習だけでなく、小学生から高校生を対象にした次世代教育や一般向けの生涯学習教育等に広く活用するため、植物



▲祝辞を述べる松尾総長

研究者を擁する博物館がその管理運営にあたることになりました。また、セミナーハウスは、プレハブ2階建て、床面積約160m²で、1階には観察園を管理する技官室のほか、実験セミナー室、トイレ、シャワー室が、2階には標本室と観察園の自然や植物の紹介を行う展示室が設けられています。

このセミナーハウスの完成によって、野外観察園で実物を見学すると同時に、顕微鏡観察や実験を通して、植物の理解や自然のおもしろさを効果的に学ぶ場が学内に生まれたことになります。これがキャンパスミュージアム実現の第一歩となり、学内の憩いの場として、また、地域貢献事業の実施等に有効利用されていくことが期待されます。



▲看板上掲式の様子



大学院文学研究科が公開シンポジウムを開催 — 今、開かれる文庫の魅力 —

大学院文学研究科は、3月13日（土）、一般社会人・市民を対象とした公開シンポジウム「今、開かれる文庫の魅力」を文学研究科237講義室において開催しました。

同研究科主催の公開シンポジウムは、平成12年度から毎年開催されているもので、今回が4回目となります。

今回のシンポジウムは2部構成で行われ、第Ⅰ部は「東海地域の文庫の魅力」をテーマに、阿部泰郎同研究科教授による「大須観音宝生院真福寺文庫」、桐原千文名古屋市蓬左文庫主査による「蓬左文庫」、塩村耕同研究科助教授による「岩瀬文庫」及び黒川典雄神宮文庫主査による「神宮文庫」と題する基調報告が、一人約30分の持ち時間で行われました。続いて、稲葉伸道同研究科教授の司会進行のもと、全体討論が行われ、前述の4名の報告者に、各文庫の現状及び将来の展望等を話してもらいました。また、討論の中で、将来的には、文庫サミットの開催についての構想も出されました。



▲基調講演をする五味東京大学教授

続いて、第Ⅱ部では、五味文彦東京大学大学院人文社会系研究科教授が、「王権と文庫」と題して基調講演を行いました。参加者は、テーマについて一般市民にもわかりやすく説明する五味教授の講演を熱心に聞いていました。

最後に、神尾文学研究科長の閉会のあいさつがあり、約5時間半におよぶ長いシンポジウムは、終了しました。参加した約270名の市民らは、途中で席を立つ者もなく、文庫の魅力を十分に堪能していました。

なお、このシンポジウムでは、参加者にアンケート用紙を配布し、意見、感想等を記入してもらい、次回の公開シンポジウムを企画する際の参考にすることになっています。また、このシンポジウムは、報告書としてまとめ公表する予定です。



▲全体討論の様子



農学国際教育協力研究センターが 2003年度第5回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、3月24日（水）、2003年度第5回オープンセミナーを「e-ラーニングの開発」をテーマに開催しました。

初めに、昨年11月から本年3月末まで同センターに客員教授として滞在していたリタ・ラウデ フィリピン大学ロスバニオス校教授が、アジア農科系大学連合（AAACU）加盟校間の遠隔教育用のカリキュラム開発を大学院生命農学研究科及び同センターと共同で研究した成果について、「Development of the Agriculture Curriculum for the Asian University Consortium」と題して話しました。アジア49か国が加盟しているAAACUと同研究科は、各大学の特徴を生かした講義内容をe-ラーニングシステムを使って相互に交換することを計画しており、リタ教授は、加盟大学のカリキュラムの特徴と必要な教育分野を研究し、修士課程にふさわしい新たに開発が期待されるカリキュラム分野について提案をしました。

続いて、前多敬一郎同研究科助教授が、「AAACUにおける遠隔教育システム」と題して、同研究科にお

いて現在10の WebCT（遠隔教育のツール）を用いたコース（大学院特論相当）を立ち上げつつある現状を報告しました。前多助教授は、2004年半ばには、加盟大学との間でe-ラーニングの実験を開始する予定であり、e-ラーニングは海外だけでなく、同研究科の教育システムを大きく変えるであろうと述べました。

約30名の参加者は、これまであまり身近でなかったe-ラーニングに興味を持ったようでした。



▲報告するリタ教授



総長等表敬訪問一覧

海外等から総長等を表敬訪問された方々は、次のとおりです。（平成16年1月～3月）

月 日	学校等	国	代表者	来学の目的
2. 27	韓国高等科学院	韓国	Hyo Chul Myung 教授 部長他1名	学術交流協定締結の調印のため（大学院多元数理科学研究科）



永年勤続者表彰式及び 退職者懇談会が開催される

平成16年3月31日付けで退職される勤続30年以上の職員の文部科学省永年勤続者表彰伝達式及び名古屋大学永年勤続者表彰式が、3月29日（月）、豊田講堂第一会議室において行われ、松尾総長から被表彰者一人一人に表彰状と記念品が手渡されました。

続いて、名古屋大学退職職員懇談会が、シンポジオンホール2階ユニバーサルクラブにおいて開催され、上記被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職



▲記念撮影

農学部・生命農学研究科事務長から謝辞が述べられました。

出席者は、退職者との今日までの思い出などを語り尽くせないまま、別れを惜しみつつ、懇談会は終了しました。



▲表彰式であいさつする松尾総長

される職員をはじめ関係者が出席しました。

懇談会では、松尾総長から、「永年にわたり、名古屋大学をはじめ、文部科学省、全国の大学等において、教育研究の発展に多大の御尽力をされたことに対する御礼と、職務を全うされ健康な状態で退任されることに対しお祝いを申し上げます。私自身も3月末に任期満了退職し、4月から本学は法人化を迎えますが、皆様方には今後も健康に留意され、これまでの経験を活かして、社会のために御貢献くださるようお願いいたします。」とあいさつがあった後、退職者を代表して宮木



▲退職職員懇談会で謝辞を述べる退職職員代表

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年3月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	エコトピア科学研究機構 学部を超えて8施設統合し新組織	3. 1 (月)	中日(朝刊)
2	「nano tech2004国際ナノテクノロジー総合展・技術会議」 理研理事長・野依良治・本学特任教授らが講演	3. 1 (月)	日刊工業
3	ひと・仕事：安成哲三・地球水循環研究センター教授「地球学」を世界に先駆け構築したい	3. 1 (月)	中日(朝刊)
4	訃報：飯島宗一・8代目総長 1日死去	3. 1 (月) 3. 2 (火) 3. 3 (水) 3. 4 (木)	日経(夕刊) 他5社
5	エコトピア科学研究機構 機構長就任決定・松井恒雄・工学研究科教授に聞く 「文理融合 実践の場に」	3. 2 (火)	中日(朝刊)
6	名大サロンの主役：二村久則・国際開発研究科教授 「アンデス地域の麻薬と政治」と題し講演 解決困難な麻薬問題	3. 2 (火)	中日(朝刊)
7	環境学シンポジウム「持続性学の確立をめざした挑戦」 基調講演、パネル討論など	3. 2 (火)	中日(朝刊)
8	名古屋大 COE 報告会 COE プログラムの目標や成果、活動計画などについて報告	3. 2 (火)	中日(朝刊)
9	文化：元文学部助教授・網野善彦さんを悼む	3. 2 (火)	中日(夕刊)
10	4月から法人化 生まれ変わる国立大 新戦力の職員募集 本学が東海・北陸地区の採用試験窓口	3. 3 (水)	中日(朝刊)
11	大学院文学研究科公開シンポジウム「今、開かれる文庫の魅力」	3. 3 (水)	中日(朝刊)
12	医学部教授会は附属病院の次期病院長に井口昭久教授を選出	3. 4 (木)	毎日(朝刊) 他2社
13	「君たちへのメッセージ ノーベル賞受賞者との対話」 野依良治・本学特任教授「人と違うことをしよう」	3. 5 (金) 3. 27 (土)	読売
14	都市創造フォーラム「語らい座」第22回例会 文化の集大成「オアシス21」 奥野信宏・副総長	3. 5 (金)	毎日(朝刊)
15	「BLS 中部」が「若手研究者のためのフォーラム」開催 理工系学生に起業家精神を指南	3. 5 (金)	朝日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
16	名古屋大フォルクローレ同好会 OB・OG 演奏会～音楽の喜び	3. 6 (土)	中日(朝刊)
17	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 チューリップ熱	3. 6 (土)	日経(夕刊)
18	名大男声合唱団創立50周年記念演奏会	3. 6 (土) 3. 17 (水)	中日(夕刊) 他2社
19	04年国際シンポジウム 奥野信宏・副総長 自立に役立つ援助を	3. 7 (日)	中日(朝刊)
20	大学院生が制作したフィンランドの名建築の模型 同国の美術館に収蔵、展示	3. 8 (月)	中日(朝刊)
21	明日の人に：中西久枝・国際開発研究科次期科長 世界の大舞台から見る	3. 8 (月)	読売
22	理研理事長・野依良治・本学特任教授 理化学研究活性化へ「イニシアティブ」を打ち出す	3. 8 (月)	中日(夕刊)
23	本学など前期日程合格発表	3. 8 (月) 3. 9 (火)	読売 他2社
24	学生之新聞：退官4教授がメッセージ 梶田正巳・教育発達科学研究科教授 「自分の問い考え続けて」	3. 9 (火)	中日(朝刊)
25	スイスの大学生が本学を訪れ理学部学生と交流 制度や教育カリキュラムの違いなどについて意見交換	3. 9 (火)	中日(朝刊)
26	学生街ダンス：3年・藤井亜矢子 第3年次編入 内容濃い学生生活	3. 9 (火)	中日(朝刊)
27	さーくるナビ：本学学生などが所属する 基礎スキーサークル「HOT DOG」 技術の向上へ日々努力	3. 9 (火)	中日(朝刊)
28	College mode：3年・丹羽亜衣 「少女ロマンス～高橋真琴の世界～」	3. 9 (火)	中日(朝刊)
29	中部経済問題研究会 国際開発研究科・多目的オーディトリウムで開催	3. 10 (水)	中日(朝刊)
30	障害者・高齢者にかかわる福祉関係者のための防災対策シンポジウム 環境総合館で開催	3. 10 (水) 3. 16 (火)	中日(朝刊)
31	科学技術交流財団 会長に豊田章一郎氏 理事長に松尾稔総長就任	3. 10 (水) 3. 12 (金) 3. 20 (土)	日経(夕刊) 他2社

	記 事	月 日	新聞等名
32	名古屋大学COE第11回オープン・レクチャー 高橋亨・文学研究科教授が講演	3.10(水) 3.16(火)	朝日(夕刊) 中日(朝刊)
33	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 長男の憂うつ人ならでは	3.11(木)	朝日(朝刊)
34	名古屋中国語教室20周年記念イベント 平井勝利・国際言語文化研究科教授による講演など	3.11(木)	朝日(朝刊)
35	愛知県西尾市・岩瀬文庫で教えられたこと 塩村耕・文学研究科助教授	3.11(木)	中日(夕刊)
36	朝日カルチャーセンター「ヨーロッパ絵画の謎解き」講師：木俣元一・文学研究科教授	3.11(木) 3.26(金)	朝日(夕刊)
37	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 ジャンクメール	3.11(木)	日経(夕刊)
38	働く世代の快眠10カ条「10カ条作成委員会」(代表：太田龍朗名誉教授)が公表	3.12(金)	日経(朝刊)
39	コーナーキック：森田美弥子・教育発達研究科教授 別れるとき	3.12(金)	中日(夕刊)
40	自主映画団体合同で上映会 本学と名城大の映研が呼び掛け18団体・個人が参加	3.12(金)	朝日(夕刊)
41	榎山女学園大は次期学長に元本学工学研究科教授・泉有亮・榎山女学園大生活科学部教授を選出	3.13(土)	中日(朝刊) 他4社
42	「国立長寿医療センター」常陸宮ご夫妻迎え開設記念式典 大島伸一総長・元本学附属病院長が開会を宣言	3.13(土)	中日(夕刊)
43	コンパス：大学出版会の活性化 本学や慶応大学などが注目すべき出版活動を展開している	3.13(土)	中日(夕刊)
44	ひと：国立長寿医療センター初代総長に就任した 大島伸一・元本学附属病院長	3.14(日)	朝日(朝刊)
45	ペーパードライヴ：不思議な話 元本学総長・飯島宗一さんが亡くなった日	3.14(日)	中日(朝刊)
46	「報道被害者支援ネットワーク・東海」(代表：平川宗信・法学研究科教授)の設立総会	3.14(日)	読売
47	名大サロンの主役：松井芳郎・法学研究科教授「国際法の使い方、作り方、教えます」と題して講演	3.16(火)	中日(朝刊)
48	今後の開発体制はどうあるべきか 組み込みソフト第一人者の高田広章・工学研究科教授に聞く	3.16(火)	日刊工業
49	研究室発：村田静昭・環境学研究科教授 研究室の学生には同じテーマを重複させないのがモットー	3.16(火)	中日(朝刊)
50	東海3県の大学医学部教授ら11人退官 本学では村松喬教授、中島泉教授、水谷栄彦教授	3.16(火)	読売

	記 事	月 日	新聞等名
51	名古屋大高等研究院セミナー 森永正彦・工学研究科教授、丹羽公雄・理学研究科教授が講演	3.16(火)	中日(朝刊)
52	大揺れの前に緊急地震速報 実用目指して試験運用 本学地震火山・防災研究センターでも多数の受け手に送るシステムを研究する	3.16(火)	中日(夕刊)
53	法人化後の役員会の理事と経営協議会の委員を発表	3.17(水)	中日(朝刊) 他3社
54	博物館協議会は博物館長に足立守教授を再任	3.17(水)	中日(朝刊)
55	科学技術週間記念講演会 福和伸夫・環境学研究科教授が「明日くるかもしれない東海・東南海地震に備えて」を副題に講演	3.17(水) 3.23(火)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
56	講座・源氏物語と能 講師は高橋亨・文学研究科教授	3.17(水)	中日(朝刊)
57	この人：附属病院長に就任する井口昭久・医学系研究科教授	3.18(木)	中日(朝刊)
58	中部電力基礎技術研究所 28研究に助成金贈呈 選考委員長は水谷照吉・工学研究科教授	3.18(木)	電気新聞
59	野依良治・特任教授 ノーベル賞の賞金を全額、本学に寄贈	3.18(木) 3.19(金)	中日(夕刊) 他6社
60	国立大学法人監事予定者 本学は中部テレコミュニケーション相談役木村洋一、公認会計士湯本秀之	3.19(金)	中日(朝刊)
61	藤巻朗・工学研究科助教授ら超電導マイクロプロセッサを開発、動作実証に世界で初めて成功	3.19(金)	日刊工業
62	教育学部は4月から始まる前期授業の7講座を一般市民に公開	3.19(金)	朝日(朝刊)
63	大学評価・学位授与機構は全国立大学の国際連携活動の評価した結果を公表 本学は2項目で最高点を得了	3.20(土)	中日(朝刊) 他3社
64	銀河系の中心部を高い解像度で撮影することに成功 佐藤修二・理学研究科教授らの研究グループ	3.22(月)	中日(朝刊) 他2社
65	時のおもりの池内了・理学研究科教授 技術的合理性とは何か 環境との共生を中心に	3.22(月)	中日(朝刊)
66	浪川幸彦・多元数理科学研究科長の数案、数が苦：考えること 素晴らしさを知る「源」	3.22(月)	中日(朝刊)
67	本学で研修中のイラク人研修医2人 広島で原爆医療見学	3.22(月)	中日(朝刊)
68	附属図書館の春季特別展「和歌の書物―新古今和歌集とその周辺」	3.23(火) 3.24(水)	中日(朝刊) 他2社
69	2006年度の入学選抜について変更点を発表	3.23(火)	読売
70	医学部は第1回21世紀COE国際シンポジウムを開催	3.23(火)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
71	学生之新聞：京都大の下宿用品リサイクル市 本学でもリユース市開催	3.23(火)	中日(朝刊)
72	科学：作ろう！日本発の英文誌 野依良治・特任教授「扱いが公平でないと感じた経験は研究者ならだれでも持っているはず」	3.23(火)	中日(夕刊)
73	永井財団賞 学術賞：板谷義紀・工学研究科助教授など 国際交流助成金：坂本渉・理工科学総合研究センター助教授など	3.23(火)	中日(夕刊)
74	愛知万博あと1年 “知の論客”万博大学へ 講師の1人、野依良治・特任教授「多彩な文化知ろう」	3.24(水)	中日(朝刊)
75	愛知万博あと1年 世界が愛知に集う アフリカ小国 PR 江南市、本学に研究のため滞在している同国の地質学者ディエリ・ディノウさんを茶会に招待	3.24(水)	中日(朝刊)
76	ざばり聞きます：西條八東名誉教授 新空港埋め立て、独自の環境調査の結果 海底の泥に汚染の証拠	3.24(水)	朝日(朝刊)
77	地球を救う植物力：松岡信・生物機能開発利用研究センター教授らのグループ 強い遺伝子特定し、イネ交配	3.24(水)	朝日(朝刊)
78	市民講座「なごや環境大学」の初代学長に松尾稔・本学総長が就任	3.24(水)	中日(朝刊)
79	松尾稔総長、中日本社へ退任あいさつ	3.25(木)	中日(朝刊)
80	地上デジタル活用 ITS 調査研(座長・森川高行・環境学研究科教授)が提言	3.25(木)	朝日(朝刊)
81	愛教大が新設の経営協議会委員発表 学外委員は榊達雄・本学名誉教授など	3.25(木)	中日(朝刊)
82	おあしす：故・有住徹弥名誉教授が開発したトランジスタラジオ博物館に寄贈	3.25(木)	読売
83	豊田講堂で卒業式 大学も社会へ旅立つ	3.25(木)	中日(夕刊) 毎日(夕刊)
84	松尾稔総長 退任記者会見	3.26(金) 3.28(日)	日経(朝刊) 他2社
85	UFJ総研と研究成果の社会活用や共同研究を進める包括的連携協定を締結	3.26(金)	毎日(朝刊) 他5社
86	愛知県内調査 本学附属病院などの国立病院の「防災」不十分	3.26(金)	

	記 事	月 日	新聞等名
87	文部科学省人事 名古屋大総長 平野真一教授	3.26(金)	朝日(夕刊)
88	「大学評価」を評価する「大学評価学会」 池内了・理学研究科教授らが設立	3.26(金) 3.28(日)	朝日(夕刊) 他2社
89	附属病院の移植外科が生体肝移植HPを開設 体験談、条件など	3.26(金)	中日(夕刊)
90	「明日の世界」名古屋で国際シンポジウム 教授による基調講演や奥野信宏・本学副総長らによる討論など	3.27(土) 3.29(月)	中日(朝刊)
91	富田武名誉教授が保管していた「梅鉢」を東大に寄贈	3.28(日)	日経(朝刊)
92	故・飯島宗一・元総長 原爆症研究から平和訴え	3.29(月)	朝日(夕刊)
93	学生 ITベンチャー 本学人間情報学研究科博士後期課程3年・服部百合絵さんら3人など3グループに優秀賞	3.30(火)	朝日(朝刊)
94	「総長顕彰」の授賞式を豊田講堂で実施 5件の個人・団体を表彰	3.30(火)	中日(朝刊)
95	本学のヨット部、OBが一念発起し復興	3.30(火)	中日(朝刊)
96	学生街ダンス：3年・丹羽亜衣 名古屋市青年選挙ボランティア 楽しく自分も啓発	3.30(火)	中日(朝刊)
97	教育基本法のシンポジウム 榊達雄名誉教授らが運営する「憲法と教育基本法の理念を実現する愛知の会」主催	3.30(火)	中日(朝刊)
98	熊野古道「みちを考える」シンポジウム 奥野信宏・本学副総長ら3人が話し合う	3.30(火)	毎日(朝刊)
99	学校法人金城学院は理事会を開き、次期理事長に同学院長の戸田安士・元本学教授を理事長に選出	3.30(火)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
100	博物館展覧会「名古屋大学の研究教育を支えた匠の技」	3.30(火)	中日(朝刊)
101	ワサビの辛味成分が神経細胞の成長を促すことを、内田浩二・生命農学研究科助教授らの研究グループが突き止めた	3.31(水)	読売
102	世界で初めて人の癌病巣を死滅させる新治療法の臨床試験に成功 医学研究科の中尾昭公・西山幸広の両教授の研究グループ	3.31(水)	読売 中日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部 総務広報課 広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

②⑤野依教授ノーベル化学賞受賞 記念樹・記念碑と記念施設

2001年12月、本学理学研究科の野依良治教授（現・独立行政法人理化学研究所理事長）が、米国のウィリアム・S. ノウルズ氏、K. バリー・シャープレス氏とともに、ノーベル化学賞を受賞したことは記憶に新しいことだと思います。野依氏の受賞がノーベル賞創設100周年という記念すべき年の受賞でもあったことは、本学のみならず日本にとっても非常に喜ばしいことであったといえるでしょう。

本学博物館の前庭には、野依氏のノーベル賞受賞を記念した記念樹と記念碑があります。その記念樹はアスナロ（翌檜）で、「学生がいつか野依教授のようになろうと夢を持ってほしい」との願いが込められています。また、スウェーデン産の御影石で作られた記念碑には、受賞の理由となった不斉触媒「BINAP」のモデル図とともに、野依氏直筆の「研究は瑞々しく、単純明快に」という文字が刻まれています。その記念植樹と記念碑除幕式は、2001年12月28日に行われました。

なお、現在、本学東山キャンパスには、野依氏のノーベル賞受賞にちなんだ二つの記念施設も建設されています。一つは「野依記念物質科学研究館」（本号掲載記事参照）、もう一つは「野依記念学術交流館」と命名されています。



▲ノーベル化学賞賞状



▲記念碑



▲東山キャンパス



▲東山キャンパス

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。